

2026/6/15

多職種の力を結集し、次代の皮膚腫瘍診療へ



日本皮膚悪性腫瘍学会 理事長 奥山隆平
(信州大学医学部皮膚科学教室)

会員の皆様におかれましては、日頃より皮膚悪性腫瘍診療の発展に多大なるご尽力を賜り、心より敬意を表します。日本皮膚悪性腫瘍学会は、皮膚科、形成外科、病理、腫瘍内科をはじめとする多様な専門領域の連携により成り立っており、その学際的な取り組みこそが本学会の大きな強みであります。

近年、皮膚悪性腫瘍の診断および治療は目覚ましい進歩を遂げております。免疫療法や分子標的治療の発展により治療成績は向上しつつある一方で、症例の高齢化や併存疾患の多様化に伴い、診療の現場ではより高度で柔軟な判断が求められるようになっております。このような時代においては、単一の専門性にとどまらず、各領域の知見を融合しながら患者一人ひとりに最適な医療を提供していく姿勢が一層重要となります。

本年7月には、京都の地において日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会が開

催されます。本大会は、最新の研究成果や臨床経験を共有し、活発な議論を通じて新たな知見を創出する貴重な機会であります。日々の診療に直結する実践的な内容から将来を見据えた基礎研究まで、幅広いプログラムが予定されており、ぜひ多くの会員の皆様にご参加いただき、互いの知識と経験を深めていただければ幸いです。

皮膚悪性腫瘍診療は決して一人で完結するものではなく、チーム医療の質がそのまま患者の予後に直結します。異なる専門領域の垣根を越え、互いを尊重しながら連携を深めていくことが、これからの医療においてますます重要になるでしょう。本学会がその架け橋となり、皆様の臨床研究活動を支える場であり続けることを願っております。今後ともご支援、ご協力のほど何卒よろしくお願ひ申し上げます。

第42回学術大会会長からの挨拶



加藤則人
(京都府立医科大学・北部キャンパス長)

2026年7月10日(金)、11日(土)に、京都市左京区のみやこめっせで「皮膚悪性腫瘍の医療―新潮流―」をテーマに、第42回日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会を開催させていただきます。

近年、医学を含む自然科学は飛躍的な進展を遂げ、その研究成果をもとに皮膚悪性腫瘍の領域においても多くの疾患の病態や生体の反応が明らかになり、新たな診断法や治療法が開発されてきました。これからもさらに多くの進歩が期待されます。この学術大会が、皮膚悪性腫瘍の診療の新潮流を知り、さらなる新潮流を生み出すきっかけになることを願います。また、皮膚悪性腫瘍の診療では、病理診断や手術などに関する知識やスキルを高めることが求められます。それぞれの分野のエキスパートから多くのことを学び、今後の診療に活かしていただけることを願って、プログラムを組みました。

特別講演では、大阪公立大学大学院医学研究科病態生理学の大谷直子教授

から腸内細菌叢とがんの関係について、東京大学医学研究所附属先端医療研究センターの藤堂真紀教授から悪性黒色腫のウィルス治療についてお話いただきます。European Association of Dermato-Oncology (EADO) University Hospital Schleswig-Holsteinの Axel Hauschild 教授に講演いただきます。これらの講演や、さまざまな分野の教育講演、CPC、ビデオセッション、一般演題などを通して、参加された皆様に多くの学びと未来に向けてのモチベーションが生まれることを期待しています。

京都の夏を快適に過ごしていただくために、ジャケットやネクタイは着用せず、涼しい装いでご参加ください。皆様と「皮膚悪性腫瘍の医療の新潮流」について京都で活発な意見交換を行えることを楽しみにしています。

会員の現況

| 会員現況 (令和8年5月1日現在) | |
|----------------------|---|
| 会員数 | |
| 1) 一般会員 | 1,386名 |
| 2) 賛助会員 | 4社 |
| | (株)ミノファージェン製薬・常盤薬品工業(株)・日本ロリアル(株)・(株)ピーシーエルジャパン |
| 3) 名誉会員 | 26名 |
| 4) 功労会員 | 92名 |
| 合計 | 1,508名 |

予後統計委員会… 皮膚がんレジストリの実施状況報告



皮膚がん予後統計委員会委員長
藤澤康弘
(愛媛大学皮膚科学教室)

謹啓

盛夏の候、会員の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。また、日頃より本学会の活動および予後統計事業に対し、多大なるご支援とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本学会の予後統計委員会では、長年にわたり悪性黒色腫および皮膚リンパ腫を対象とした全国調査を継続し、我が国の皮膚がん診療の基盤となる貴重なエビデンスを蓄積してまいりました。しかし、近年の免疫チェックポイント阻害薬や分子標的薬の登場による劇的な治療体系の進化、そして複雑化する診療環境の変遷を背景に、我々は今、大きな転換期を迎えています。このような状況を鑑み、奥山理事長および加藤予後統計委員会委員長(当時)による強力なリーダーシップのもと、2024年度より本事業を抜本的に拡充し、「レジストリ研究」としてリニューアルいたしました。

今回の刷新における最大の特徴は、対象疾患の拡大と管理体制の強化にあります。従来の2がん腫に加え、実臨床データの蓄積が急務である乳房外パジェット病および皮膚血管肉腫を統合し、「主要4

がん腫」へと調査対象を拡大いたしました。さらに、解析の精度を担保するため、各腫瘍領域に3名ずつの担当委員を配置する専門的な体制へと増強を図っております。また、新たに研究事務局を設置し、専門的なデータ管理および進捗管理を中央一括で行う体制を整備したことで、これまで以上に信頼性の高いリアルワールドデータの構築が可能となりました。

現在、本研究への参加施設は全国で90施設を超え、登録症例数はすでに13000例に達しております。この大規模なデータベースは、希少がんを含む各疾患の日本人における予後・経過や、最新治療の真の有効性・安全性を明らかにする上で、極めて重要な「国家的資産」といえます。本事業から得られる知見は、我が国独自の診療ガイドラインの最適化のみならず、将来的な個別化医療の実現に向けた強力な推進力となることを確信しております。

レジストリ研究の成否は、会員諸氏による日々の地道な症例登録の積み重ねにかかっております。集積された13000例の「臨床知」を、未来の患者さんへ最善の医療として還元すべく、今後とも一層のご協力とご鞭撻を賜りますよう、切にお願ひ申し上げます。

謹白

2026年7月吉日 日本皮膚悪性腫瘍学会 予後統計委員会

皮膚がん診療ガイドライン第4版



皮膚がん診療ガイドライン作成委員会委員長 中村泰大
(埼玉医科大学国際医療センター皮膚腫瘍科・皮膚科)

2023年3月より改訂第4版の作成

に取り掛かったガイドラインですが、現在全7がん種(メラノーマ、有棘細胞癌、基底細胞癌、乳房外パジェット病、皮膚血管肉腫、メルケル細胞癌、皮膚リンパ腫)すべての診療ガイドライン邦文版、英文版が公開されました。当初の予定から大きな遅滞なく公開できたことは、ガイドライン委員の先生方のご尽力、日本皮膚悪性腫瘍学会、日本皮膚科学会の関係各位サポーターのおかげであり、この場をお借りいたしまして厚く御礼申し上げます。

現在本邦の改訂ガイドラインは世界でも大変注目を浴びております。この数ヶ月の間でも、ガイドライン委員の先生方が韓国、台湾、欧州などで依頼講演をされております(図)。これもご尽力頂きましたガイドライン英文版の公開の賜物と考えております。

加えて、本診療ガイドラインは金原出版株式会社の協力のもと、書籍版としての発行を鋭意準備中です。また、MindSのガイドライン公開後評価の申請中であり、ガイドラインの質につき、公的評価を頂く予定となっております。

このように本改訂ガイドライン公開後も様々な動きがありますが、会員の皆様におかれましては、引き続き実臨床で皮膚がん患者さんに本ガイドラインをお役立て頂ければ大変幸いに存じます。

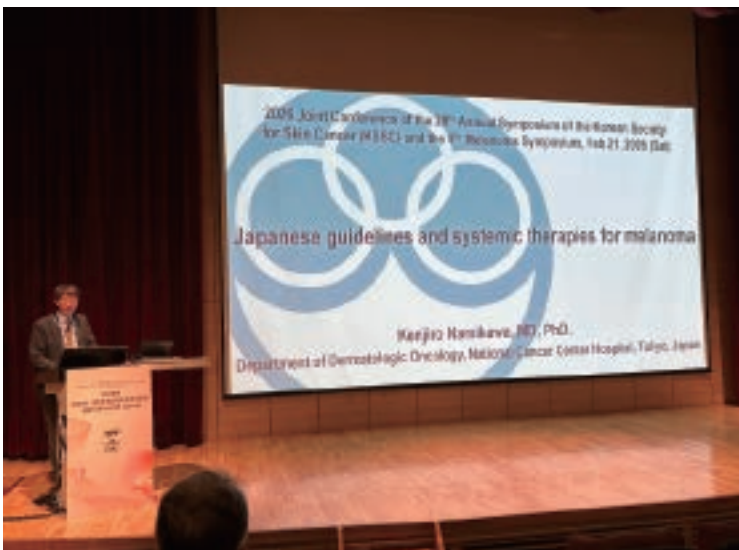


図 2026年2月に韓国皮膚悪性腫瘍学会でガイドライン講演を行っている並川健二郎委員(メラノーマガイドライン)

皮膚がん取り扱い規約改定 第3版の完成及び出版の御報告

皮膚がん取り扱い規約改訂委員会委員長

安齋眞一（PCI東京 病理・細胞診センター）

既報の通り、皮膚がん取り扱い規約改訂第3版（第2版までは皮膚悪性腫瘍取り扱い規約）は、2023年9月より実質的にその作成を開始し、日本皮膚病理組織学会のご協力を得て、後藤啓介先生はじめ数多くの先生方のご尽力でその作成をすすめて参りました。今回は、前版の作成からすでに15年あまり経過したこともあり、その内容を一新し、はじめ、多数の病理医に参加して頂き、皮膚がん（旧悪性腫瘍）診療ガイドラインとはその内容を完全に分離したので、他の癌腫の取り扱い規約のように、実際の臨床の場での皮膚がんの取り扱いに役立つものができたと考えています。また、皮膚がん診療ガイドラインの作成委員会とも密に連絡を取り、内容の重複がないように、また、用語な

どが統一されるように細心の注意を払って作成しました。

委員としては、日本皮膚悪性腫瘍学会会員のみなならず、

日本皮膚病理組織学会や日本病理学会の会員の先生方にも御参加頂きました。前回報告の通り、2024年11月末にβ版としてWEB上で公開し、日本皮膚悪性腫瘍学会の理事・評議員および日本皮膚病理組織学会会員にパブリックコメントを募集しました。そのコメントに対応する改訂を加え、さらにその後発刊されたUICC (Union for international cancer control) のTNM分類第9版の改訂にも準拠するよう内容をアップデートしました。2026年2月ようやく完成しました。2026年2月20日金原出版から無事発刊されたことを御報告いたします。今回の皮膚がん取り扱い規約の改定により、日常の皮膚がん診療がスムーズに運ぶようになることを、委員を代表して切に願っております。

雑誌委員会



雑誌委員会
委員長 門野岳史
(聖マリアンナ医科大学皮膚科)

Skin Cancer 誌は2025年度も予定通り年3回オンラインジャーナルとして発行することができました。昨年度よりはやや投稿数は減少しましたが、学術大会における様々な講演の内容も掲載されていますので是非一読頂ければ

事務局より

▼賛助会員およびバナー広告を募集中です

賛助会員、およびSkinCancerサイトでのバナー広告提供企業を引き続き募集しております。関係者の皆様には引き続きご協力をお願いいたします。

▼令和7年度若手トラベルグラント受賞者のお知らせ

第2次受賞者：柏原大朗（国立がん研究センター 中央病院・放射線科）
参加学会／ESMO 2025（開催地／ドイツ・ベルリン）
演題：A Phase II Study of Boron Neutron Capture Therapy (BNCT) Using CICS-1 and SPM-011 in Patients with Unresectable Angiosarcoma. (ポスター発表)
助成額：30万円

と思います。また、本年も学術大会で特別講演や教育講演をされた先生方に原稿執筆の依頼をさせていただきます。お忙しいとは思いますが、Skin Cancer 誌をより良いものにしていただいておりますので、ご助力いただければ幸いです。一般演題からの投稿ももちろん大歓迎です。なお、今回投稿規程を少し変更させていただきます。上長による内容確認および投稿承諾書というものが投稿の際に追加になります。ご一部ではあるのですが、投稿論文の中で指導医のチェックが行き届いていないものがみられます。投稿論文の一定の質を担保することも学術雑誌として重要ですので、ご協力ご理解ください。

第3次受賞者：井上禎夫（埼玉医科大学国際医療センター・皮膚腫瘍科・皮膚科）
参加学会／ESMO Asia Congress 2025（開催地／シンガポール）
演題：Efficacy and safety of S-1 for locally advanced or recurrent/metastatic cutaneous squamous cell carcinoma: A retrospective, multicenter study. (ポスター発表)
助成額：15万円

第4次受賞者：若澤億斗（東京大学・皮膚科）
参加学会／EADO 2026（開催地／チェコ・プラハ）
演題：Genetic alterations and prognosis in extramammary Paget disease: potential roles of somatic CDKN2A variants in poor outcomes. (ポスター発表) ★ポスター賞を受賞
助成額：30万円
(文責) 事務局 木庭幸子